

現代ストーリーマンガの成立 (3)

—手塚治虫の「文法」—

榊原英城

はじめに

- 第1章 手塚治虫 1992 …… (4節途中まで第27巻第1号)
第2章 手塚治虫 1942 …… (1節途中まで第27巻第2号)
…… (1節末尾まで本号)

第2章 手塚治虫 1942

1 [承前]

まず、私家版『ロスト・ワールド』第3巻のあとがきから引用する。

「この「ロストワールド」私家版は、ぼくが北野中學二、三年の頃に書いたもので、その前に「幽霊男」(「火星博士」のもとになった物語です)を書いたのにつづいてゐます。／「ロストワールド」は、ごらんの通りまだ絵としての体をなしてゐませんが、すくなくとも従來の漫畫本とはちがった新機軸を出さうと試みたことはたしかで、冒頭に「これは漫畫にあらず、小説にもあらず」とわざわざうたつてゐる所など、意気込みはたいしたものだったやうです。[……]／「ロストワールド」はこのあと昭和十八年から十九年にかけて、四百ページほどの大冊で改定版を書いてゐます。これは今思い出してもこの第一號よりもかなり繪が進歩しており、本當はこちらの方を復刻したかったのです。内容も映畫的手法をふんだんに入れ

てスピーディになってゐます。所がこの第二號は、學校の友人に貸したまま、行方不明なのです。表紙までつけて、ちゃんとした本ですから、もしいつの日か見つかることがあれば、ぜひ復刻したいと思つてゐます。／第三號「ロストワールド」は、敗戦の翌年（昭和二十一年）の秋から大阪の輿論新聞（今の大阪日日新聞？）に毎日連載した、完全な新聞漫畫です。これは新聞自體の都合があつて途中で中斷されてしまひましたが、恥かしいくらひ程度の低い作品でした。第四號がれいの不二書房版のこども向け漫畫、そして第五號は秋田書店の「冒険王」に昭和三十年に連載した「前世紀星（これも中斷しました）」です。つまり「ロストワールド」は未練がましく五回も書いてゐるのです。氣がのればまたぞろ書き改めるかも知れません。〔……〕／この原稿が書かれてゐる間に、日本とアメリカとの國交は險惡となり、ぼくたちも「日米もし戦はば」などといふ事でアメリカを^{〔ママ〕}仮装敵國とするのが常識になっておりました。ランプが最後に「アメリカ人だ！」と名乗るのはさういつた時代感覺のあらはれだと思ひます。」次に『手塚治虫漫画全集』に収録された不二書房版『ロストワールド』^{〔ママ〕}の「あとがき」（1982年）を引用する。

「ロストワールド」は、おそらくぼくの作品の長編の部類では、いちばん初期にあたるものの一つです。／その試作は、中学生時代にさかのぼります。／中学にはいるまで、ぼくは漫画をノートに鉛筆でかいていました。ところが、友だちのおじいさんをモデルに“ヒゲオヤジ”というキャラクターをつくつたとき、それを主人公に、はじめてペンにインクという材料を使って漫画をかき、「おやじ探偵」として完成しました。〔……〕続いて、鉛筆とペンを併用した第二作「ヒゲオヤジのバリトン工場事件」をかきました。これらは、とじて装丁し、クラスの中で回覧させておりました。／そして、とうとうオール丸ペンに墨という本格的な原稿を仕上げたのが、中学二年生のときで、「幽霊男」という三百ページのSF風冒険物語です。サイボーグ、ロボット、マッド＝サイエンティスト、そして国際

陰謀団のいりみだれるこの荒唐無稽きわまるメロドラマは、一部を「メトロポリス」「火星博士」「魔法屋敷」「来るべき世界」などに流用し、ヒゲオヤジは全編にフル活動して“伴俊作”という本名まで授かりました。／そして、続いてかいたのがこの「ロストワールド」です。〔……〕／ただ、当時（昭和十四、五年頃）の漫画本には、すくなくともこういった小説的な（といっても幼稚なものです）、またアンハッピーな結末になる漫画は、まず、なかったと思います。そういう意味では、これは劇画のはしりだと思えますし、げんに試作の冒頭に「これは漫画に^{あら}非ず、小説にも^{あら}非ず。」とわざわざことわってあるくらいですから、そうとう気負っていたのだと思います。／この私家本についてはいろいろかきたいこともあるのですが、「名著刊行会」からこの試作の復刻版が出ており、そのあとがきにくわしくかきましたので、そちらのほうの説明をお読みくださればさいわいです。／で、この「ロストワールド」は、その後二十歳前後にもう一度改稿した私家本をつくり（こちらのほうは、ほくとしても自信作だったのですが戦後紛失しました。同窓生のだれかが所有しているのだとは思いますが——）さらに、昭和二十年の十月から大阪の新聞に連載され（これは未完）、続いて、不二書房から子ども版としてかきおろしたのが、この本なのです。」

ところが、『手塚治虫大全 1』に収録された「思い出の日記（昭和二十年）」は1979年に公表されているものだが、四月二十五日の冒頭に、「朝、「幽霊男」を執筆していると〔……〕」との記述があり、四月二十七日の記述のなかに「〔……〕一日漫画を書いた。」とある。おそらく「幽霊男」のことと考えられる。同書には「戦後SFマンガ第一号」と題した文章（1979年）も収められている。『ロスト・ワールド』に触れた部分を引用する。

「〔……〕昭和二十一年の秋、大阪の赤新聞のひとつだった『^{よろん}輿論新聞』が発刊されると同時に、ほくは連載漫画を書いている。そのタイトルが『前世紀星』である。タイトルの如く、これは『ロスト・ワールド』の新聞版

なのだ。／じつは『ロスト・ワールド』は、ぼくが中学生時代、昭和十七（一九四二）年頃に書きおろした物語で、友人のあいだをまわし読みさせていたものである。〔……〕／〔……〕この昭和二十一年版『前世紀星』は、未完ながらおそらく、戦後のあらゆるSF小説、漫画を通じて第一号だったのではないかと、自負している次第。」

私家版『ロスト・ワールド』が収録されている『日本名作漫画館・SF編』IIIに付された小冊子「解説」は小野耕世氏が書いているが⁴⁾、『ロスト・ワールド』の描かれた時期については、手塚治虫の言葉をそのまま伝えている。

「あの最初の『ロスト・ワールド』を描かれたのは、おいくつのときだったんですか。中学時代でしょう？」／「うん、十四、五歳のときだね」／そんなやりとりを、このマンガの作者と交したのは、一九八一年の十二月のことでした。すると、こうして最初の、いわば手塚治虫にとっての〈原ロスト・ワールド〉が陽の目を見るのは、描かれてから四〇年ぶりということになります。」

「解説」の表紙には、「昭和16年」と明記されている。昭和16年は手塚治虫「十三歳」である。小野氏は「解説」の末尾に以下のことを注記している。

「なお、この復刻版からは省かれていますけれども、私家版オリジナル原稿三分冊のそれぞれの巻末には、そのころ、手塚治虫が描いていたいずれも私家版の作品目録、〈てづかまんがそうしょ〉次回作予告のようなものが記されています。そのタイトルだけをちょっと紹介しますと、「オヤジの開拓譜」「オヤジの南海海戦記」「幽霊男」「ロマンス島」「奇蹟の森の物語」「恐怖菌」などの名があります。これらの作品が、後に、どのような形をとっていったか、あれこれ想像してみるのも一興でしょう。」

私家版『ロスト・ワールド』の3分冊のそれぞれには、「てづかまんがそうしょ」の4、5、6、と番号が付いている。従って、それ以前に作品数は分からないが、3冊の私家版が描かれていることになる。1942年「初めてペンと

インクを使って」描いたのが事実ならば、1941年に『ロスト・ワールド』を描く前に、既に3冊の「てづかまんがそうしょ」が描かれていたことになるが、それらが『ロストワールド』の「あとがき」に書かれた三つの作品——「おやじ探偵」「ヒゲオヤジのバリトン工場事件」「幽霊男」だと考えることもできる。しかし、「オール丸ペンに墨という本格的な原稿」である「幽霊男」は「中学二年生のとき」に描かれたのではなく、「昭和二十年」だと仮定してみよう。「中学二年生」は手塚治虫の実際の生年では1940年から1941年にかけてであったことになるから、4年ほどの食い違いが生ずる。「幽霊男」執筆に関連した矛盾した記述は、私家版『ロスト・ワールド』の執筆時期についての記述に疑いを抱かせる。

生前の文章に私家版『ロスト・ワールド』の執筆時期に関して曖昧な点があるのは、前記の理由（生年を大正15年だと公言していたこと）によるのだから、不合理は解明し得ないにしろ、他の習作群との関連、執筆の順序、のちのB6作品群との繋がりなどを少しでも窺うことのできそうな文章をもう少し拾ってみようと思う。

『手塚治虫漫画全集』の「あとがき」から見てゆく。『冒険狂時代』の「あとがき」（1978年）には次のような記述がある。

「この支離滅裂な漫画の原案は、じつはぼくが^中^学^生のときかいた一千ページ近くにおよぶ習作です。／題名を「おやじの宝島」というこの習作は、主人公の少年武士のかわりに、例のヒゲオヤジが役をつとめていたのです（もちろん現代の服装でした）。そしてこのガムシャラな私立探偵と、フランスのガニマル警部とシャーロック・ホームズが、宝島の地図をめぐるって、怪盗アルセーヌ・ルパンとあらそうという大筋だったのです。／〔……〕さしあたりストックしている案もなく、こまっちゃまって、とうとう中学生時代の習作に手を入れて出すことになったのです。／ところが「おやじの宝島」は、どちらかというと劇画にちかいらリアルな物語の上、恋愛までからんでいたんで、かなり大幅に内容を変えないわけにはいきま

せんでした。」(傍点引用者)

『メトロポリス』の「あとがき」(1979年)には「〔……〕大構想をねるには、すこし期間がなさすぎました。そこで、ぼくが学生[・]のころかいた「幽霊男」の一部を使い、また「おやじの宝島」の名でかき下ろしかけて、すててあったものの登場人物を借りたりして〔……〕とある(傍点引用者)。

ほぼ同じ頃にかかれた二つの「あとがき」にさえ矛盾がある。「おやじの宝島」は「一千ページ近くにおよぶ習作」なのか「かき下ろしかけて、すててあったもの」なのか。「おやじの宝島」の描かれた時期も、「幽霊男」の描かれた時期も、最初[・]の「ロスト・ワールド」が描かれた時期も、なぜか同じ時期に重なっているかのごとき印象を与えようとしている。数多くの習作を次々に描いたからといって、こんなにも記憶が曖昧になるとは考えにくい。辻褄を合わせようとしている風にも見えず、むしろ、曖昧にしようという意図があったのではないかと推測したくなる。

『地底国の怪人』の「あとがき」(1982年)の冒頭の文章は次のようになっている。

「世に出た長編単行本の第三作です⁵⁾。しかし、第一作の「新宝島」は原案が酒井七馬氏でしたし、第二作の「火星博士」(中学時代描いた「幽霊男」のリメイクです)は、まだ戦前の漫画本のおいを残しているのです。この「地底国の怪人」が実質的にはいわゆるストーリー漫画の第一作といえます。」

『手塚治虫初期漫画館』別巻『手塚漫画のはじまり』(1980年)に収録された「SF三部作あれこれ」という文章(1975年の談話)は、『ロスト・ワールド』その他についてかなり詳しく語っているものだが、それを読むと、『幽霊男』と最初[・]の『ロスト・ワールド』の描かれた順序がいよいよ分らなくなってくる。

「三部作の大部分のテーマと設定は、戦争中の学生[・]の頃にもう既に作ってあったもので、かいた原稿は肉筆回覧誌みたいな形になっていました。

『ロスト・ワールド』は、ぼくが中学時代からかき始めて、高校時代に完成した肉筆の非売品の作品として、既にあったわけです。これはまったくそのままの、もっと映画的な感覚にあふれた一千ページ位の決定版でした。戦争直後になくしてしまったんですが、今思うとほんとうにもう宝物です。友達に貸してそのままになってしまったんですが、学校の友達が誰か持っているはずです。／〔……〕 ぼくの戦争中にかいたものというのは、すごくすさまじいんです。たとえば『ロスト・ワールド』の最後に、恐竜にみんな食われてしまうその中で、一人片目という奴が恐竜に踏みつぶされる所がありますが、踏みつぶされた片目のすさまじい死に様が出てくるんです。血がドバーツと飛び散りまして、頭骸骨がこっぱみじんになっているような絵です。〔……〕／〔『メトロポリス』に〕ヒゲオヤジを助けるずんぐりしたロボットがいるんですが、あれは、『幽霊男』という戦争中の作品からとったんです。そういうふうには戦争中の作品というのは、アイデアが出なかったのか、あるいはもったいないから使ったのかわかりませんが、あっちこちに出ているんです。たとえばミッチイという子供は、あれももとは『火星博士』にパイ子という名前が出てくるんです。あれは実はミッチイの前身でして、そのさらに前身はやっぱり『幽霊男』に出てくるんです。『幽霊男』のミッチイというのが非常に好きで、あちこちに出してるんです。その一つが『メトロポリス』なんです。」(傍点引用者)

『ぼくはマンガ家 手塚治虫自伝・1』⁶⁾からも習作に触れている部分を引用しておこう。1945年の空襲の折の記述。

「友人の家はあらかじめ焼けてしまった。ぼくが描きためた漫画の原稿を、ごっそり貸してあった友人の家も、きれいさっぱり焼けてしまった。焼け跡に舞い上がった灰の中に、何百枚かの原稿の丹精こめて書いたヒゲオヤジやアセチレン・ランプ達が昇天していった。〔……〕／ぼくは、自分の部屋にうず高く積まれた原稿の山を見た。三千枚近くもある。色が変わって

黄色くなったものや、埃をかぶったもの……——よくもこれだけ、頼まれもしないで描いたものだ——われながら感心した。ちょうど十五冊めの大長編が、今日、明日のうちに仕上がる予定になっている。そのタイトルは「おやじの宝島」——およそ一千ページの大河ものである。どうせ目のみることにはあるまいと思ったが、焼いてしまうのはなんとももったいない気がした。そして、八月十五日がやってきた。」(傍点引用者)

ところが、その後(1988年)のインタビューが『手塚治虫 漫画の奥義』に収録されている(インタビューは石子順氏である)。

「——仲間で相当亡くなった人もいますか。」

手塚 いますね。ちょうど東京大空襲のあったところに、大阪も大空襲になって、大分死にました。ぼくの前稿を借りたまま死んじゃったのもいる。前稿が二百何ページか一冊にまとまっていた。これはいまでも惜しいんだけれども、貸したまま全部焼けちゃった。

——それは、どんな作品ですか。

手塚 『恐怖菌』というの。SFです。だから、『恐怖菌』と、『ロストワールド』と、それから『幽霊男』というのがありまして、この三つがその当時、三部作とっていた。『幽霊男』というのは、いまの『メトロポリス』。」

なぜ、このように、どの文章も少しずつ違うのだろうか。記憶違いとも考えにくい。私は粗捜しをしているのではなく、正確なところを知りたいのだが、ともかく、手塚治虫自身の言葉は信憑性が薄いと言うほかない。私家版『ロスト・ワールド』は「中學二、三年」の執筆ではないことは確かなようだ。そうなると、習作「ロスト・ワールド」が二度描かれたということも疑わしくなってくる。曖昧さが増すばかりだが、今少しこだわってみたい。

習作マンガのうち、長編は5、6冊に留まるのではないかと推測できそうな発言がある。『一億人の手塚治虫』⁷⁾からの孫引きである。

「手塚 ええ。それで、ちょっと見ていただきたいものがあるんです(と

言って糸でとじた小冊子を取りだす)。昔私が小学校のときからこういうような形の子どもの漫画の落書きをしていたわけです。こういうのがいま十冊、二十冊残っているんですよ。小学校二、三年のころから中学にかけての、肉筆原稿が……。

本誌 ちゃんと本のスタイルですね。

手塚 はい。いろんな漫画が入っているんですよ。落書きみたいな、紙芝居みたいなものがありますし、あるいは一冊の本で、表紙から奥付けまでかいてあるものもある。たとえばこの「漫画と考えもの」の場合は最後に奥付けもあるし、発売日九月三日とかいてある。もちろん、目次もある。こういうのを小学校三年生くらいのときかいた。」

『手塚治虫漫画 40 年』⁸⁾には、私家版『ロスト・ワールド』に触れて、以下の記述がある。

「手塚治虫は子ども時代から「昆虫戦線記」「おやじ探偵」「バリトン工場事件」「おやじの南海海戦記」「ロマンス島」等の習作を描いていた。〔……〕現在、見ることができるのは、〔……〕「ロスト・ワールド」全3冊である。15歳のときに描いたといわれるこの作品は、昭和23年に不二書房より刊行された「ロスト・ワールド」全2巻の習作である。〔……〕この本には戦前の、つまりデビュー前の手塚治虫の全てがつまっているといっても過言ではないだろう。〔……〕」

「15歳のときに描いたといわれる」作品に「デビュー前の手塚治虫の全てがつまっている」という文章は疑念をますます募らせる。混乱を整理するために、年譜の記述に戻ることしよう。小野耕世氏の『手塚治虫』は伝記としては信頼でき、習作についても触れているが、描かれた年がやや分かりにくい。そこで、手塚治虫生前の年譜と死後のそれとはどう違っているのか、生前の一例を『手塚漫画のはじまり』（1980年）の巻末に付されたものから抜き出してみる⁹⁾。

一九二六 十一月三日、大阪府豊中市に生まれる。

一九三九 十二歳。北野中学（現北野高校）入学。漫画の回覧誌をつくり、本格的に描きはじめる。

一九四三 十六歳。予科練を受けるが、視力が悪く不合格。特殊訓練所に入れられる。栄養失調になり、おまけに腕に発疹ができ、退所。

一九四四 十七歳。旧制浪華高校^{〔ママ〕}入学。淀川の軍需工場へ。空襲の最中、寮やトロッコの横で漫画を描いていた。

一九四五 十八歳。三月の大空襲で、友達にあずけてあった漫画の原稿もすっかり焼けてしまった。〔……〕浪華高校より大阪大学医学部予科（第二医学部。軍医養成のため増設された臨時学部）へ転入学。まもなく浪華高校は廃校となる。〔……〕四コマもの『マアちゃんの日記帳』の連載が決まる。

一九四七 二十歳。『新宝島』発売。〔……〕大阪大学医学部入学。

一九五三 二十六歳。インターンを終り、医師国家試験にパス。この年、阪大、医学部予科廃止。

『手塚治虫漫画40年』に付された略歴によれば、「大正15年11月3日、大阪府豊中市に生まれる。大阪府立池田師範付属小学校から、北野中学に進み、昭和19年、浪速高校理乙（現在大阪大学教養部）に入る。／昭和21年4月、大阪大学医学部に入学、26年卒業、同大学付属病院にインターンとして勤務。〔……〕」となっている¹⁰⁾。

死後の年譜は、東京国立近代美術館編集「手塚治虫展」カタログ（1990年）に付された資料編の年譜・作品データ（森晴路/水谷長志編）から抜き出そう。

1928 11.3 〔生まれる〕

1935〔7歳〕 4. 大阪府立池田師範付属小学校（現、大阪教育大学付属池田小学校）に入学。

1937〔9歳〕 三年生の二学期〔……〕最初のマンガ「ピンピン生ちゃん」を描く。

- 1939〔11歳〕「支那の夜」という長編マンガを描いて学校で回覧、先生にも評判となる。〔……〕「ピーピーピーコ」「ママーたんていものがたり」「生ちゃんの宇宙旅行」などを描く。
- 1941〔13歳〕〔……〕大阪府立北野中学（現、北野高校）に入学。〔……〕「昆虫戦線記」「昆虫の身の上ばなし」などの昆虫を題材にしたマンガもかく。
- 1942〔14歳〕初めてペンとインクを使って“ヒゲオヤジ”を主人公に「おやじ探偵」を描く。つづいて第二作「ヒゲオヤジのバリトン工場事件」をかく。〔……〕肉筆誌「動物の世界」を発行。翌年にかけて自家製の「原色甲蟲^{〔ママ〕}図譜」第一集、第二集を製作。大学ノートに絵入りのクイズを描いた「智恵の豆袋」を発行（18号まで作成）。これらはすべて手書きで清書し、挿絵を描き、製本したものである。
- 1943〔15歳〕〔……〕「昆虫の世界」を発行（9月から1944年6月まで11冊発行）。〔……〕「おやじの南海海戦記」を描く。
- 1944〔16歳〕〔……〕「勝利の日まで」を描く。8月、仁川の一里山健民修練所に入所、腕が水虫にかかり出所。9月より勤労働員で淀川べりの大阪石綿に勤める。
- 1945〔17歳〕3.28 北野中学を卒業。〔……〕7.1 大阪大学附属医学専門部に入学。／丸ペンに墨を使って「幽霊男」を、続いて「冒険狂時代」の原案となった劇画的タッチの「おやじの宝島」を描く。
- 1946〔18歳〕1.1 デビュー作の4コママンガ「マアチャンの日記帳」の連載が『少国民新聞（のち毎日小学生新聞）関西版で始まる。〔……〕10.30 〔……〕最初の「ロストワールド」を描く。／10.21 「ロスト・ワールド^{〔ママ〕}」〔連載〕関西輿論新聞〔……〕
- 1951〔23歳〕3.24 大阪大学医学専門部卒業。
- 1952〔24歳〕7.16 医師国家試験にパス。
- 結局、これ以上正確なことは分からない。多くの疑問点が残っている。長

編の習作は何冊描かれたのか。そのうち、「ロスト・ワールド」の習作は二度描かれたのか、一度だけだったのか。私家版『ロスト・ワールド』として公刊されたものが1946年（8月か10月か？）に完成した作品だとすると、中学時代に「ロスト・ワールド」は描かれなかったのか。死後の資料『手塚治虫の軌跡』、「手塚治虫展」カタログを信ずるなら、「ロスト・ワールド」は一度、1946年、デビュー後に描かれ、生前刊行された私家版『ロスト・ワールド』がそれであると断定できる。不二書房版『ロスト・ワールド』（1948年）との酷似の理由も納得が行く。

1942年に「初めてペンとインクを使って」「おやじ探偵」を描き、その後、いくつかの作品が描かれ、長編の習作として題名が挙がっているものとしては、「幽霊男」「おやじの宝島」「恐怖菌」などがあり、何らかの事情で紛失をした作品が（複数？）あるらしいことは分かったが、「おやじの宝島」などについて不明な点が多く、今のところ、長編ストーリーマンガの成立の時期は1942—46年の間という以上には特定することはできない。

〔注〕

- 3) 不二書房版は「地球編」「宇宙編」に分かれ、全2冊であるが、全集では1冊に合本とされた。なお、表題『ロスト・ワールド』については、不二書房版では、表紙は『^{ロストワールド}前世紀』、背表紙は『ロスト・ワールド（前世紀）』、扉は「ロスト・ワールド」の下に「前世紀」と書かれ、奥付は「ロストワールド」と不揃いであり、私家版『ロスト・ワールド』では、表紙は『ロスト・ワールド』、「前世紀」がその下に小さく書かれ、背表紙は『ロスト・ワールド（前世紀）』、扉は「前世紀」の下に「ロストワールド」と書かれ、奥付は「ロストワールド」となっている。全集ではすべて『ロストワールド』に統一されている。煩わしいので、不二書房版と私家版は『ロスト・ワールド』、全集は『ロストワールド』と表記することにしたい。
- 4) 小野氏の「解説」は『ロスト・ワールド』全3巻と、田川紀久雄の『恐竜時代』『幽霊博士』とを併せて解説した小冊子である。
- 5) なぜ三作目なのか。『火星博士』と同じ1947年に、『キングコング』『怪盗黄金バット』が出版されているはずだが。
- 6) 大和書房、1988年（新装版）。初版は1979年。
- 7) JICC出版局、1989年。1967年の「異色対談・のらくろとアトム」からの引用。

- 8) 秋田書店, 1984年。執筆協力として森晴路氏(手塚プロダクション)の名がある。
- 9) (制作 有北郁子)と末尾に記されている。

なお、小野氏の『手塚治虫』の記述から年譜的事実を拾っておく。「一九二八(昭和三)年の十一月、豊中市の岡町で生まれた。」「大阪府立池田師範付属小学校を卒業後、一九四一年、北野中学(いまの大阪府立北野高校)へ入学」「中学三年になった一九四三(昭和十八)年の六月ごろから、勤労動員がはじまった」「四年生になると、夏休みのまえに、同じ学年の十二人の生徒に、学校から知らせがきた。夏休みのあいだ、からだをきたえるため、大阪府が用意した特別の施設にはいれ、というのだ。〔……〕オサムもそのひとりだった。／その施設は、〔……〕入り口に〈一里山健民修練所〉と記された看板がかかっていた。」「修練所での合宿は、九月一日までつづいた。だが、オサムは、一カ月の修練期間のうち、じっさいには、せいぜい二週間ほどしかいなかったのだ。くちびるのまわりに発疹が出て、〔……〕両腕がはれ、皮膚がむけてくる。〔……〕それでオサムは、家に帰された。〔……〕診察をうけると、水虫のようなものが腕にできていて、悪化しているといわれた。／それからオサムは、両腕に包帯をまかれ、かなり長いあいだ、自宅のソファにすわってすごすほかなかった。〔……〕腕の自由がきかないので、好きなマンガも描けない。〔……〕こうして中学四年の夏休みは終わった。そしてこれが中学時代最後の夏休みになったのである。なぜなら、旧制中学は五年生のはずだったが、オサムの学年の生徒だけ、四年でくりあげ卒業させられることが、すでに決まっていたからだ。／〔……〕九月から、こんどはずっと、工場で働くように決められていた。〔……〕秋とともにオサムたちは、学校に通学するかわりに軍需工場〔……〕に通勤することになったのである。」「年があげ、オサムは家から近い大阪府立浪速高校を受験して落ちたが、次に受けた大阪大学付属医学専門部の試験には通った。大阪帝国大学には、もともと医学部があったが、医学専門部はそれとはべつに、軍医を早く多く育てるために、一九三九(昭和十四)年につくられたもので、専門学校と資格は同じだ。〔……〕」「三月二十八日、オサムたち四年生は、五年生といっしょに北野中学をいちおう卒業した。しかし、勤労動員はつづいていた。医学専門部の入学式に出たあとも、オサムは、六月まで大阪石綿に通いつづけていた。〔……〕」「七月、オサムは医学専門部(医専)の一年生として、大阪中之島公園にある大阪大学医学部の建物まで通っていた。〔……〕」「〔……〕五年で卒業のはずだったが、マンガに時間をとられていたオサムは、一年留年した。そして、〔……〕一九五一(昭和二十六)年三月に、無事、医専を卒業した。／〔医専は〕この年に廃止されたから、オサムたちは最後の卒業生ということになる。それから一年、大阪大学付属病院でインターンをつとめてから、翌一九五二(昭和二十七)

年に、オサムは東京にひっこした。」「また、この年の七月、オサムは医師の国家試験を受け、翌一九五三（昭和二十八）年九月、医師の免許を手にした。」

- 10) これは明らかに学歴詐称ではないか。訂正する機会は何度かあったであろうに、それを失したのか。それとも手塚治虫はいたずらっぽく年譜をごまかして、ファンをからかっていたのだろうか。『ブラック・ジャック』の「古和医院」のなかで、無免許の医師古和先生に、ブラック・ジャックが「インターン制度は戦争中にはありません」と忠告する場面をふと思い起こす。

(1993年8月31日)

〔追記〕

(1) 『COMIC BOX』、1993年8月号は「'92年まんが総決算」特集号として編集され、各ジャンル別総評がなされている。そのジャンルの一つ「まんが批評」において、竹内オサム氏が「“手塚治虫”，“データ”，表現論・'92まんが批評花ざかり」という文章を書いている。1992年の「マンガ批評の傾向」を「三つにまとめ」、その一つに、「手塚治虫関係の批評や研究書の発行」を挙げ、以下のように述べる。「〔……〕タイトルにそのものズバリ手塚治虫と銘うたれたものだけでも、次のようなものが出版された。刊行順に羅列しておく。／①『手塚治虫論』竹内オサム（平凡社）／②『手塚治虫はどこにいる』夏目房之介（ちくまライブラリー）／③『手塚治虫・覚書』榊原英城（近代文芸社）／④『手塚治虫と路地裏のマンガたち』中野晴之（筑摩書房）／①は、ぼく自身の著書なので、何とも言えない。評言は、さしひかえるべきだろう。ただ、いくつかの新聞の書評欄がひろってくれたし、②の本で好意的に引用され、また③では極めて批判的に紹介されたので、それなりに反応はあったと思っている。／②〔……〕／③は、手塚マンガ論というよりも、これまでの手塚論を再検討するという「手塚マンガ論」論。筆者の手塚治虫論あるいは手塚マンガ論は、この後に書かれるべき空白として残ってしまっている。／④は、今年に入って刊行された本。〔……〕竹内氏は私が氏の著書にいささかの異を唱えたことが、よほど気に障ったと見える。新聞の書評欄にも載り好評だった会心の著を貶すとは何事かといった口吻が感じられる。この文章は拙著および私の竹内氏の著書に対する見解について誤った情報を（意図的に、かもしれないが）述べているように思われる。それ故、二、三の事柄を指摘し、正確を期しておきたい。まず、氏の著書が刊行されたのは1992年2月末であり、私が拙

著の元になった論考を書き終えたのは同年3月初めであったため、私は氏の著書を読みはしたが、ごく簡単なコメントを付記することしかできなかった。但し、氏の著書の第一章から第五章については、1991年『月刊百科』連載時に読みえたので、いささかの批判はしたが、「極めて批判的」というほどのものではない。私は氏の著書を「紹介」するつもりではなく、この先、より詳しく分析し検討する予定である。(ただ、批判というには余りに生温い私のコメントを「極めて批判的」と受け止められるようでは、これ以上の批判は自粛しようかという気にもなる。勿論、いつか、そういう気がしただけだが。)拙著には竹内氏の他の文章を「好意的に引用」してあるし、手塚治虫研究の専門家の氏に、よいものを書いてほしいと激励しているつもりなのである。だから、当たり前なことだが、私は全面的な否定はせず、よい部分はよいと評価したのだ。私は拙著の「付記」のなかに「最終章、『新宝島』を扱った「映画的手法・再考」は評価に値する。」と書いておいた。夏目氏が「好意的に引用」したのも同じ最終章である。夏目氏は自著の「入稿寸前に」竹内氏の著書が出版されたため「補足的にふれておきたい。」と書いて、最終章を「好意的に引用」し、「紹介」している。私も夏目氏と同じ章を評価したのに対し、竹内氏が、夏目氏からは「好意的に引用され」、私からは「極めて批判的に紹介された」と書くのは何か釈然としない。私の氏の著書への批判が不当なものであるという印象をそれとなく伝えようとしたのではないかと勘繰られる。それというのも、拙著を「手塚マンガ論というよりも、これまでの手塚論を再検討するという「手塚マンガ論」論。筆者の手塚治虫論あるいは手塚マンガ論は、この後に書かれるべき空白として残ってしまっている。」と「紹介」していることだ(傍点、「筆者」)。拙著は手塚治虫論ではなく、最近の手塚治虫論への批判、問題の提起を意図したものだ。そのことははっきりと書いておいた。尤も、その割には私の手塚マンガ観が強く出すぎてしまって、先走って作品評価をしすぎてているが。ともあれ、どうせ拙著などわざわざ買ひ求めて読む読者はあるまいと思ってだろうが、不正確な「紹介」をするのはよくない。ややもすると仲間どうしで馴れ合い、ちょっとした批判をも煙たがるマンガ評論の現状は、竹内氏も悪しき傾向であるとお思いであろう。

(2) NHK教育テレビ「NHK人間大学」で1993年10月より「ヒトと技術の倫理」という加藤尚武氏の講座が始まった。テキストによると、氏は第1回

を「鉄腕アトムの人間性」と題して問題提起をし、最終回に当たる第12回でも「科学と倫理——鉄腕アトムとターザンの対話——」と題し、視聴者への親しみ易さを考えてか、通俗的アトム像を利用して、科学技術と人間のかかわりのあり方を説いている。この講座自体は一般向けのもので取り立てて問題にするほどのものではないが、テキスト中の記述に手塚治虫への大きな認識の間違いがあるので指摘をしておきたい。第10回「ターザンの倫理」に次のような文章がある。「手塚治虫には『ジャングル大帝』という作品があるが、これがターザンとは正反対の哲学を説いている。主人公のレオ（白いライオン）は、人間世界からジャングルに帰ったあとで、動物たちに畑をつくらせ、食堂をひらき、合唱をさせるのである。つまり、動物の人間化、野性の文明化でハッピーエンドとしている。この作品が『漫画少年』で連載を終えたのが一九五四年（昭和二九年）四月である。三月にはビキニ島の水爆実験で第五福竜丸が死の灰をかぶるといふ事件が起こっている。それにもかかわらず、日本人一般の意識のなかには〈科学そのものの危険性、非人間性〉という思想はなかった。手塚治虫は、野性から科学文明への進歩という観念を積極的に『ジャングル大帝』の結末としてうたい上げている。」加藤氏が『ジャングル大帝』を結末まで読んでいないことは明らかだが、第1回の講座に参考文献として挙げられた桜井哲夫氏の『手塚治虫』をもいい加減にしか読んでいないらしいのは不可解を通り越して啞然としてしまう。桜井氏の著書では、ターザンと絡めて『ジャングル大帝』を批評しているからである。桜井氏に対しては反論したが、ここまでいい加減な先生には反論のしようもない。が、著名な先生の語ることだから、視聴者は信用するだろう。手塚治虫は「野性から科学文明への進歩という観念を積極的に『ジャングル大帝』の結末としてうたい上げている。」というのは全くの誤りであると言っておかななくてはならない。そして、その当時「日本人一般の意識のなかには〈科学そのものの危険性、非人間性〉という思想はなかった」かもしれないが、手塚治虫は「〈科学そのものの危険性、非人間性〉という思想」を『ジャングル大帝』以前から、例えば『メトロポリス』などではっきりと描いていること、そして、当時それらの作品を読んだ少年たち、一般化する根拠がないというなら、少くとも私はその「思想」をしっかりと読みとったとだけ付け加えておく。

(1993年10月1日)